

アングロノルマン研究

—Anglo-Norman Studies—

福井秀加

I アングロノルマン語の発達と衰退

イングランドでは、度重なるデーン人の侵入とその圧迫に抗するために、Æthelred 二世がノルマンディ公家の Emma と婚姻を結んだ時より、僅かながらもフランス語がこの地に根を下ろし始めたと言えるであろう。‘Unræd’ (No-Counsel) という譚名のアゼルレッド王は、当時、ノルウェー王であり、デンマーク王をも兼ねていた Swein Forkbeard 王自らのひきいる船団の来襲に抗しきれず、遂に1013年、ノルマンディへと亡命した。

その後のイングランドにおけるデーン王朝 (1016—1042) 断絶の後、ノルマンディから帰国して即位した、アゼルレッドの王子 Edward 王 (位1042—66) は、一族や、多くのノルマン人を従えて海を渡って来た。青年期をノルマンディで過ごしたエドワード王は、言語、思想、感情もフランス的であったろうし、ノルマンの移住者たちはフランス本土におけるよりも優遇されたので、さらに多くの異邦人がイングランドに流れ込んだのであった。彼等は移住地の慣習や制度をさほど尊重しなかったと言われる。そしてフランス語 (Norman-Frenchとも呼ばれる) を使用していた。しかしこれは、Guillaume le Conquérant によるイングランド征服後に起こった、フランス語伝播の、大きな勢いを恰も予告する、ほんの序曲に過ぎない。

ウィリアム征服王 (位1066—87) に続いて、多数の征服者たちがこの地に渡来した。数千人のフランス人 (主にノルマンディ出身) が宮廷、裁判所、教会や学校の重要な地位につき、商人も London やその他の町に定住した。そして、クリュニー派やアウグスチノ修道会の修道士が数多くイングランドに送り込まれた。ノルマン人の大小封建領主が次々とイングランドの土地を支配し、ウィリアム王が、ウエストミンスター寺院で英国王として戴冠してより20年後の1086年には、国内に存在する男爵領を所領する、英国人の領主は二人だけになってしまっていた^①。

ノルマン・コンクエストの結果、イングランドの支配階級の殆どがノルマンディ出身のノルマン人となったために、フランス語は貴族の宮廷用語となっただけではなく、法律の用語となり、民衆を相手とする裁判の用語ともなった。こうして、フランス語の使用は急速に広まり、古英語の古い法律文はフランス語に、また、ラテン語に翻訳された。それは時代の要請であったのだ。

ここにウィリアム征服王の法律文書がある。これはイングランドにおいて、フランス語で作成された条文である。ノルマン・コンクエスト以後の英国を歴史的にアングロ・ノルマンの時代と考えることが出来るが^②、ノルマン王朝成立以後の英国で用いられ続けたフランス語 (最初は主にノルマンディ方言) は、大陸フランス語と異なる発達を遂げるので、これを言語学上、アングロノルマン語とよぶのである^③。ウィリアム王の条文は、いうま

アングロノルマン語の発達と衰退

でもなく、アングロノルマン語で作成された法律文の最初のものであった。

E s'il ne pot guarant ne testimonie aver, si perderad e parsoudrad e pert son were vers sun seinur. Ceo est en Merchenelahe e en Denelahge. En Westsexenelahge ne vocherad il mie sun guarant devant iceo qu'il seit mis en guage. En Denelahe mettrad l'om l'aveir en uele main, de ici qu'il seit derehdned;^④

「当該者は、保証人を得ざれば、領主に対し、自己の財産を失うべし。これは Mercia 地域ならびに Dane 地域に於けるものなり。West-Saxon 地域に於いては、当該者の、保証人を得ざる前に、当該者を保証人として出廷させ得ることを得ず。Dane 地域に於いては、財産は末子に至るまで平等に分割せらるる。」

この原文はやがて公文書用に、ラテン語に翻訳された。

司教や修道院長や、また、修道士が、英仏海峡をしげく往来し、イングランドの学者たちも、フランスの司教座教会付属学校や、僧会教会付属学校や、後には、パリ大学に学んだ。

ロンドンに商売に好都合な場所となったために、ノルマンディの主要都市、Rouen や Caen に生まれた者は、ロンドンに移住して定住し、フランス語は商業界の言語ともなった。このことは、現存する都市法や商業ギルドの条例が、全てフランス語ないしラテン語で書かれてあることによって知られる^⑤。

Anjou 家よりイングランドの王が即位してからは南フランスのアンジュー領と Southampton のような海港との間に葡萄酒貿易が行われるようになり、フランス語は海洋貿易用語としても使用されるようになった^⑥。

また、12世紀末に発布された条令「侵奪不動産占有回復訴訟法」‘assize of novel-disseisin’によって全ての自由民は、(主としてアングロ・サクソン以来の freeholders であるが、ノルマン人の貴族が支配階級になってからは、アングロ・サクソン時代の上流階級の者も多数この自由民になった)土地所有の権利を侵害された場合、領主の裁判所に訴訟をもち込むのではなく、王室裁判所に訴えることとなった。王の裁判所はフランス語を使用するのである。

ゆえに、この条令はフランス語をイングランドの田舎の諸地方にまで広く行き亘らせるのに大いに役立ったのであった^⑦。

学校ではフランス語の教育が行われ、フランス人でない者も身分の高いものは手紙もフランス語で認めた。Oxford, New College の創設者、William of Wykeham はイギリス人にもフランス語で手紙を書いたという^⑧。

次に Earl of Hereford であった Humphrey de Bohun が Henry 三世に送った手紙の一節を紹介する。

Sacez, sire, ke icest Mardi feimes assembler la comune de Londres, e en la presence de tuz feimes lire vostre maundement; e quant nos lur avium diit ceo ke fut afere, asez s'en apaerent a noz avis. De autre part, sire, nus lur avium comande ke les chaenes ke furent remises ke mentenaunt saunz delai seent abatues, e les clefs des portes rondues, e nul debat n'i trovames.^⑨

「陛下に言上奉ります。去る火曜日にロンドン市民を集合させ、全員の目前にて、王陛下の御命令を朗読致させました。致すべきことに就きましては、多くの者が我々に同意致しました。一方、再び繋ぎました鎖はこれを一刻も早く解き、城門の錠を潰すよう命じて

ございます。異議を申す者はございませんでした。』

ここには、後に詳記することであるが、アングロノルマン語の特徴がよく現われている。

アングロノルマン語はまた、祈祷や、讚美歌に用いられた。アングロノルマン語とラテン語を混用した祈祷もある。‘Mayden moder milde, Oyez cel oreyson’, と、このように、当時の英語とアングロノルマン語を混淆した祈祷も残っている^⑩。

明らかに素人の手になる、恋文風の散文のような小詩にも、アングロノルマン語に英語を交ぜて作ったものがみられる。

M., ma espeeie,
 Vus estes bone e bele;
 Gardez qe vus seez lele
 Aval la mamele,
 Ceo vus mand vostre abe de grant reverence.
 Loke nou that hit so be in obedience.
 Vus estes mout naturele
 Pur ceo l'en vus apele
 Mergerete la bele;
 Vus ne estes pas pucele
 Pur ceo qe vus estes frele,
 L'amour e le espeeialté
 Entre nous seit privé,
 Qe nul esclandre pusse lever.
 De ces vus pri e requer. ^⑪ vv. 1—15.

「親しき M. (マルガリト), 善良で美しいお方, 乳房の下を忠実に守りませ。尊き尊師がこれを貴女に申します。従順に, そうするように, 気をつけなされ。貴女は大層素直なお人, それゆえ, 美しいマルガリトと, 人はいう。貴女は処女^{おとめ}にあらぬゆえ, 誘惑には, もろいお人だ。我々の愛情, そしてこの格別の間柄は, 何の躓きも起きぬよう, 秘めやかにしておかねばなりませぬ。」

作者はかなりの要職にある聖職者らしい。Chaucer や Langland に非ずとも, 顰蹙させられる程の厚顔破廉恥な僧侶の姿は, この時代の一面の現実であったようだし, このように巫山戯たフランス語も又然りであった。

イングランドにおけるアングロノルマン文学の流行を証明するものは, アングロノルマン語で書かれた写本の数である。宮廷や, 教会, 大貴族や小貴族が学問と文学を奨励したために, アングロノルマン語で書かれた多くの作品がイングランドに生まれた。これらは主に宗教文学, 教訓文学, 歴史, ロマンズ, 諷刺物語であり, 抒情詩, 劇詩, 自然科学に関する作品も含まれている。

12世紀末葉に, イングランドで文筆活動を行った Hue de Roteland は, 彼の韻文物語 *Ipomedon* の冒頭で次のように言う。

「ラテン語で書いたから, 叙述がまずいというのではありませんが, 学のある者より俗

人の方が多いのです。ラテン語は翻訳しなければ全然理解出来ない人達が沢山です。ですから私はできるだけ簡潔に、ロマンス語で話しましょう。そうすれば、学のある人も無い人も、分かって下さるでしょう。」

ロマンス語というのはもちろんフランス語のことであって、Rotelandの場合は、イングランドにおいて書かれた特徴をもった、アングロノルマン語のことである。(以下 AN 語と略す)

Ne di pas, q'il bien ne d(e)it/ Cil, q'en latin l'ad descrit/ Mes plus i ad leis ke
lettrez:/ Si li latin n'est translatez, / Gaires n'i erent entendanz;/ Por ceo voil (jeo)
dire en romanz/ A plus brev(e)ment, qe jeo saurai, / Si entendrunt (&) clerc &
lai. ②

vv. 25—32.

Roteland と同時代に活躍した Denis Pyramus による、*La Vie Seint Edmund le Rei* にも同じ趣旨の事柄が述べられてある。「私はこれをおしまいで、英語と、ラテン語から、訳した。フランス語でなら、立派な人々も、身分の低い人々も理解できるのだから。」

Translaté l'ai desque a la fin,
E del engleis e del latin,
Que en franceis le poent entendre,
E (tut) li grant, e (tut) li mendre. ③

vv. 3267—3270.

説教をフランス語 (AN 語) で書くについての弁明もある。「学問のない者がしりごみすることのないように、私はラテン語をやめて、ロマンス語で申しましょう。」

Geo larrei le latin sil dirrai en romanz;/ Cil ki ne sunt gramaires ne seient pas
dutz. ④

vv. 7—8.

フランスの女流詩人 Marie de France は Rouen 近辺の Vexin 地方に生まれ、イングランドに渡り、Henry 三世に仕えて Roteland や Pyramus と同時代に文筆生活をし、Shaftesbury 尼修道院長となって他界した、と推定されているが、彼女も聖者伝 *Espurgatoire Seint Patriz* の冒頭に、このように書き残している。「この書き物(ラテン語の本)にありますその俣を、ロマンス語に書きうつして、人々の記憶に留まるようにいたしましょう。」

Voel en Romanz mettre en escrit, / Si cum li livre le nus dit, / En remembrance
e en memoire;/ ⑤

vv. 3—5.

ラテン語から、多くの人々の理解するロマンス語 (AN 語) に訳すことは当時の文人のつとめであった。

同じく Marie de France の抒情譚詩集 *Lais* の序の一節から、当時の多くの文人たちが、きそってフランス語への翻訳を試みたという例証があげられる。「私はラテン語をロマンス語に訳しまして、何か良い話を書きたいと存じましたが、あれ程多くの方達が翻訳

という仕事に携っておいでです。ゆえに同じ仕事を手がけましても、あまり評判は得られぬと存じました。』

Pur ceo començai a penser/ De aukune bone estoire faire/ E de latin en romaunz traire;/ Mais ne me fust guaires de pris;/ Itant s'en sunt altre entremis. /^⑧ vv.28—32.

このようにして、イングランドに広まっていったアングロノルマン語、またその文学は13世紀半ばにしてその最盛期に達するのであるが、この言語は、しかしながら、大陸フランス語とは異なる、島嶼フランス語となって、時代の経過とともに大陸フランス語との劈開を徐々に深めて行った。Marie de France は彼女自身敏感に、この言語の動向を感じ取っていた様子で、「私はマリィと申します。フランス生まれです。」^⑨と、わざわざ自分が生粋のフランス生まれであると *Fables* の跋文に断わって物語を書いた。Guernes de Pont-Sainte-Maxence による *La Vie de Saint Thomas Becket* (1172—1176) の中にも、早くから Marie de France の趣旨と同じ言葉が見える。「私の言葉は良いのです、フランス生まれですから。」Mis language est bons, car en France sui nez, v. 6165. ^⑩

フランス本土に生まれた作家は、自分の出生地に敢えて言及することによって、自身の言葉の良いこと、その正統性を暗に強調した。この種の発言は屢々見られるようになり、イングランドにおいてフランス語 (AN 語) を用いる文人たちは以後、自分たちの言葉と大陸フランス語との相違をますます判然と認識するようになってくる。

アングロノルマン語がこうしてイングランドに広まり、定着しながら、次第にその社会的優位を失ってゆく社会的要因としては、次のいくつかが挙げられるであろう。

(1) 13世紀初頭に、英国王 John (位1199—1216) は、フランスのフィリップ 尊厳王 (位1180—1223) によって、ノルマンディ及びその隣接諸州を没収された。その結果、イングランドと大陸との生活は以前ほど緊密な関係を保ち得なくなった。大陸におけるジョン王の領土没収という社会的不安はジョン王の領土に関係していた、多くのフランス人をイングランドへ引きよせる結果となり、ジョン王も彼等を優遇した。その故もあって、13世紀のアングロノルマン文学は活発な盛況を呈するのであるが、この政治的事態は、究極的には AN 語、文学を衰退へと導くこととなった。

(2) Oxford 大学が Paris 大学に較べて遜色のない名声を確立した。Robert Grossetest や Duns Scotus などの優秀な教育陣容はイングランドの学者のパリ留学を事実上不必要なものにした。それはますます島嶼語の AN 語を孤立状態に置くことになったのである。

(3) 大陸との諸関係が変化し、イングランドの現状と将来性が更に大きく変化して、従来は主としてフランス語を話していた諸階級の人たちの間に英語が用いられるようになり、フランス語使用に反対する国民的動向が徐々に明確な形をとり始めた。例へば、ヘンリー三世のフランス一辺倒の政策 (フランスから渡ってきた外国人による政治的支配) に対して1258年「オックスフォード改善案」(法令)が成立した。王から不当に、土地や城を贈与されていた外国人 (ポアトウ人の貴族たち) は追放されたのである^⑪。ヘンリー三世

アングロノルマン語の発達と衰退

は1285年には、フランス語と英語とによって布告を出した。エドワード一世(位1272—1307)は1295年の議会から、永続的に commons(イギリス人の平民)も地方の代表として議会に召集した。教育界においては14世紀半ばまでフランス語が教育の手段に使用されていたが、Trevisa 訳の Higden「万国史」*Polychronicon* の年代記によると、Merton College school で文法を教えていた John of Cornwall はそれをフランス語によらず、英語で解釈させるようにしたという^⑧。1347年に John Cornwall は6人の少年を教えていたらしい^⑨。これらはイギリス国民性の覚醒であり、イギリス人による母国語、英語への復帰であった。

このような動向はしかし、直ちに AN 語の衰退に連なったものではない。文学や法律や教育の分野ではフランス語がしっかりと根を下ろしており、英語はゆっくりとフランス語にとってかわったのであった。

宮廷では英語を母国語とする最初の王、Henry 四世の治世まで、AN 語が用いられ続け、征服者の言語としての社会的威信を保っていた。Ranulf Higdenの「万国史」がその様子を物語っている。

「……故に貴族の子供たちは、揺籃で揺られている頃からフランス語を話すように教えられ、ガラガラの玩具で遊びながらフランス語を話すようになる。そして山家育ちの連中も、貴族の真似をしたがり、人に尊敬されるために、大いに努力してフランス語を話そうとする。」

Also gentil men children beþ i-tauzt to speke Frensche from þe tyme þat þey beþ i-rokked in here cradel, and kunneþ speke and playe wiþ a childes broche; and vplondisshe men wil likne hym self to gentil men, and fondeþ wiþ greet besynesse for to speke Frensche, for to be i-tolde of. (Trevisa's translation)^⑩

英語の方言は多種多様であったから AN 語は便利な共通語として用いられ続けたのである。「……というのは、Kent の人であれ、南部であれ、西部であれ、北部の人であれ、フランス語ならば発音も、言葉も同じように話す、母国語の英語ならば、そうはできない。」AN 語の特殊性を示す、このような言葉も Higden「万国史」にみられる。

...for a man of Kente, southern, western and northern men speken Frensche al lyke in sowne and speche; but they can not speke theyr Englyssh so.^⑪

ここで、ひとまず、我々はアングロノルマン語の時期的区分にも留意せねばならない。AN 語の歴史は主要な2時期に分かれる。

§ 第1期は即ち発展期であって1250年頃までに至る。

それは、フランス本土との社会的関係の変動がフランス語使用に影響を及ぼし始め、イギリス人の間に、イギリス人としての自覚が生まれ、英語使用への積極的動向が明確な形をとり始めた時期までである。

この時期には AN 語は、フランス語の一方言とみなし得る。この言語が蒙った特殊な諸条件によって段々と変化したとは言え、世代から世代へと受継がれた、生きた地方的言語

形態をもっている。

発展期はさらに1120年頃を境に、2分することができる。前半は、フランス西部方言と殆どかわらず、征服者とその子孫との言語であった。後半は、12世紀前半から13世紀前半までであって、AN語が、混血家族や純粹のイギリス系の人々によっても、広く使用され続けた時期である。この時期にAN語は、英語の言語習慣による影響と、島嶼語として置かれた孤立状態という立場のために、かなり独得の発展形態を示している。イングランドの島がフランス大陸の様々な地方と政治的、商業的關係を保つようになり、フランスの様々な地域の言語がイングランドに持ち込まれた。この言語の雑多な状態は孤立した島嶼語の不安定性を高めた要因でもあった。

§ 第2期は衰退期であって1250年頃より15世紀初頭に至る。

この時期にAN語はその基盤から切り離され、使用をますます制限され、誰の母語でもなくなり、常に習得されるべき言語となった。音と形を無差別に使用するという特徴をもったこの島嶼AN語は、大陸フランス語との劈開をますます広げたのであった^⑧。

一人のイギリス人僧侶が書いた、13世紀の *Poème sur l'Antechrist et le Jugement dernier* には、フランス語に自信のないことがくどくどしく述べられてある。

「私はロマンス語で物語を作ったり、説教をラテン語から訳したりよう致しませぬ。と申しますのは、私はパリにも、サン・ドニの修院にも、おりましたことがございませんのでして。そうでございますゆえ、私がロマンス語で上手に語れませんが、誰方もお咎め下さいますな。」

Jeo ne sai guers romanz faire/Ne de latyn ma sermon traire,/Car jeo ne fu unques a Parys/Ne al abbaye de saint Denys,/Pur ceo nul homme ne me doit blamer/Si jeo ne sai mye bien roumauncer;/^⑨ vv. 63—68.

13世紀後半に書かれた、*Life of Edward the Confessor* にも興味深い一節がある。

「私が文法の規則を守らなくとも、規則の仲間入りをしなくとも、非難されることはありませんまい。どうすることもできないのですから。ラテン語では主格のものをロマンス語では対格にいたします。私の知っておりますのは、イングランドのまやかしフランス語でございます。それを学びに、よそへ参りませんでしたもの。けれど、他国で言葉を習われた貴方様は必要とあれば、これをお直し下さいませ。」

この序文は断片で残っているだけであるが、女性が書いたものである。AN語に対する絶望的な口調が読みとれる。

Si jeo l'ordre des cases ne gart,
Ne ne juigne part a sa part,
Certes nen dei estre reprise,
Ke nel puis faire en nule guise.
Qu'en Latin est nominatif
Co frai romanz acusatif

アングロノルマン語の発達と衰退

Un faus franceis sai d' Angletere
Ke nel alai ailurs quere,
Mais vus ki ailurs apris l' avez,
La u mester iert, l' amendez. ㊟

vv. 41—50.

Wilham de Wadington も13世紀末の作品、*Manuel des Pechez* において同様の弁解をしている。

「フランス語で韻文を書けませぬが、誰方もお咎めなきように。イングランドに生まれ育ち、秘蹟を受けた者にございます。」

De le français ne del rimer/Ne me dait nuls hom blamer,/Kar en Engleterre fu né/E nurri lenz e ordiné. ㊟

この頃、英語勢力挽回を特に意図して書いた書物も多い。14世紀にノーサンブリアで書かれた *Cursor Mundi* の作者は言った。「この書物は英語で読むよう、イギリス人のために、メリーイングランドのイギリス人、世俗の人にわかるよう英語に訳した。われわれはふつう、この国で、フランス語の韻文を読むが、それはフランス人のために作られたもの。フランス語のわからぬ者には何の役にたとう。イングランドの国民は、一般にイギリス人なのだ、その人達のよく分かる言葉で、大方話す必要がある。」

Dis ilke boke es translate,/vnto engliss tung to rede/For þe luue af englijs lede,
/Englis lede of meri ingeland/For þe comen to vnþerstand./Frenkis rimes here
i rede/Comunli in ilka stede;/þat es most made for frankis men,/Quat helpis him
þat non can cen./Of ingland þe nacione/Er englijs men in comune,/þe speche þat
men may mast wid spede/Mast to speke þar-wid war nede; (ll. 232—244.) ㊟

14世紀末の *Speculum Vitae* では、William of Nassyngton が、何故英語で著述するかという理由を長々と説明している。「私としばらくおつき合い下さいますなら、英語でお話し申しましょう。ラテン語などは使わずに、皆さんの話す英語で、イングランドに生まれた者なら誰にも分る英語で語りましょう。この言葉はお偉い方も世間の人も、たいがい使います。まこと、ラテン語は、学校で習った者しか分かりません。宮廷に出入りし、その中にいる者にはフランス語が分かり、ラテン語のわからぬ人たちがおります。また、ラテン語が少々、フランス語は覚束ない者もおります。しかしラテン語もフランス語もわからぬ者でも、英語はよく分かる人たちがおります。学者もそうではない人も、老いも若きも、皆、英語は理解します。ですから、たしかに、われわれは誰でも分かるその言葉を、学問のない者つまり、世間一般の人たちのために使おうと思います。」

In English tonge I schal 3ow telle,/3if 3e wyth me so long wil dwelle./No
Latyn wil I speke no waste,/But English, þat men vse mast,/þat can eche man
understande,/þat is born in Ingelande;/For þat langage is most chewyd,/Os wel
among lered os lewyd./Latyn, as (ms. al) I trowe, can nane/But þo, þat haveth

it in scole tane, / And somme can Frensche and no Latyn, / Ðat vsed han cowrt and
dwellen þerin; / And somme can of Latyn a party, / Ðat can of Frensche but febly;
/ And somme understonde wel Englysch, / Ðat can noþer Latyn nor Frankys. / Boþe
lered and lewed, olde and zonge, / Alle vnderstonden english tonge; / Ðer fore I holde
most syker þan, / We(Ms. Wo) schewe þat langage þat eche man can, / And al for
lewed men namely, / Ðat can no maner clergy. (ll. 61—82.) ㊟

対岸のフランス大陸では、13世紀に、当時のイングランドで使われていたフランス語（AN語）を揶揄した作品が現われていた。かの人気を博した「狐物語」*Le Roman de Renart*の中でも、イギリスの旅芸人に化けたルナール狐の滑稽なアングロノルマン語が誇張されて、描き出されている。ルナールの言葉には、AN語の特徴とみなされている、語末音の脱落（e.g. *Sir, dir, Angleter* における語末の -e）、語頭音の消失（e.g. *Pris*, における語頭音 a- の消失）、母音の混同（*ü* と *(u>)*o, e.g. *fot*, ）、性の誤り（e.g. *ta raison* の代りに *ton raison*）、動詞活用（e.g. *m'ansaing, avra, trover, fout*）、子音 m と n の混用（e.g. *compaing* の代りに *conpaing*, *don* の代りに *dom*）、は文章法上の誤りなどがあり、それらは次の引用文中に見ることができる。（イタリック体筆者）

Ez vos Renart qui le salue;
 ≪ Godehere, fait il, bel *sir*,
 ne sai rien de *ton raison dir*.
 —Et Diex vos saut, fait il, amis,
dom estes vos? de quel país?
 vos ne futes pas nez de France
 ne de la nostre connoissance.
 —Naie, seignor, mes de Bretaing,
s'avra tot perdu mon gaaing
 et *fot* cerchié par men *conpaing*,
 ne *trover* neant que *m'ansaing*.
 Toute France et tote *Angleter*
fout cerchié por mon *conpaing quer*;
 si voil Paris torner ainçois,
 tant avrai mout bien *pris* françois, ㊟ vv. 2402—2416.

14世紀になると、イングランドでは、フランス語の学習が奨励された。オックスフォードの学生は、フランス語又はラテン語を話すよう定められ、大学側もフランス語教育を奨励した㊟。13世紀の末、CanterburyやWestminsterのベネディクト派修道院の修道士たちは学校と修院回廊ではフランス語またはラテン語で会話をするように規定されたという㊟。Merton College Schoolでは、14世紀半ば、John Cornwallが少年たちに、文法を英語で解釈させたのであったが、1340年に創立されたオックスフォードのQueen's Collegeの学寮では、少年たちは、絶えずラテン語か、フランス語で話しているように躰られていた㊟。

政治的な見地からもフランス語の習得は必要であった。カペー王朝のシャルル四世が男

中世イングランドのフランス語教本

嗣なく身罷った後、エドワード三世が王位継承権を主張して英仏百年戦争を没発させた時期である。エドワード三世の1332年の議会においては、フランス語を習得させるように、と定められたのであった。

「諸侯、豪族、騎士および立派な町の立派な人たちは全て、子供たちにフランス語を教え、学ばせるように鋭意専心し、それによって子供たちが、戦争に対して一層の心構えを持ち、一層役に立つことができるように、と命じられた。」

Encorres fu-il ordonné et aresté que tout seigneur, baron, chevalier et honnestes hommes de bonnes villes mesissent cure et dilligence de estruire et aprendre leurs enfans le langhe françoise par quoy il en fuissent plus able et plus coustummier ens leurs gherres.^④

既にこの時期には、イングランドに根を下ろしていた AN 語は大陸フランス語から隔絶した、島嶼語の色彩を強く帯びていた。そして、それは最早真に生きた言語ではなかった。貴族、上流市民階級、聖職者および法律家という一定の階級間で使われ、諸規則、公の記録の作成や、書簡に使われていたこの言語は、この時期には、学習し、教えられねばならぬ言葉となっていた。

II 中世イングランドのフランス語教本

貴族の幼い子供たちが「しっかりとフランス語を学ぶために、」... pur ben aprendre, /En fraunceis... v. 216.^⑤ と、13世紀末に作られた教科書が残っている。子供たちだけではなくイギリス人のために、フランス語教本は必要であった。フランス語をイングランドで教えるための 'manual' などは、恐らく、この時期よりも尚早い頃から作られてあったものと推察される^⑥。しかし、13世紀より14世紀にかけて現われたフランス語教本は相当の数に上ったらしい。この時期においては、衰退した島嶼語をよいフランス語へと復帰させるために、正字法論や文法論も書かれたのであった。現存する、フランス語教本に関する写本はすべて、13世紀より以後に作られたものである^⑦。

1923年にオックスフォードより刊行された、アングロノルマン語、文学についての概説書 *Anglo-Norman Language and Literature* は、斯界の碩学 Johan Vising の手になる文献であって、この書の目録には、当時のイングランドで書かれた、フランス語教本に関しての、現存する写本が記されており、それらの刊本、研究書が挙げられてある。以下、Vising に基いてそれらを詳解しよう。

The Thirteenth Century:

1. (321) (viz. Vising's catalogue number) *De Utensilibus*, Latin treatise with A.-N. glosses by Alexander Neckam (d. 1217)
 - 1) Wright, T. in *A Volume of Vocabularies*, London, 1837, p. 96.
British Museum, MS. Titus D xx (late XIII)
 - 2) Scheler, ed., "Trois Traités de Lexicographie latin du XII^e et XIII^es."
Jahrbuch für romanische und englische Literatur, VII, 58.

Cambridge, Trinity College, MS. O. 7. 9 (XIII)
Bibliothèque Nationale, fonds lat. MS. 217 (XVI), fonds lat. MS. 7679 (XV)
Cambrai, MS. 867 (875) (XIII)
Bruges, MS. 536 (XIII)

2. (322) *Latin Glossary with A-N. glosses*, c. 1200
 - 1) Gröber, "Strassburger Festschrift Phil. und Schulmänner Altfranzösische Glossen," *Festschrift zur XLVI Versammlung deutscher Philologen*, 1901, p. 39. seq.
Oxford, Bodleian Library, MS. Digby 172
Oxford, St. John's College, MS. 178 (XIII) another similar glossary (unpublished) in MS. f. 414—19.
3. (323) *Latin-French Glossary*, 1st half of XIII.
 - 1) Extr. Meyer, P. in *Jahrbuch für romanische und englische Literatur*, VII. 37. also in *Docum. manuscr.*, 123.
Glargow, Hunterian Museum, MS. R. 7. 14 (middle XIII)
4. (324) *Legal Terms*, a short list. Middle of XIII.
 - 1) Wright, T. & Halliwell, J. O., *Reliquiae Antiquae*, 2 vols., 1841—3, i, 33.
British Museum, MS. Cotton Jul. D vii (f. 127) (c. 1250), MS. Cotton Galba E iv (f. 46) (1285—1330)
5. (325) *Plant Names*, Latin-French-English list of the middle of XIII.
 - 1) Wright, T. & Halliwell, J. O., *Reliquiae Antiquae* i, 36.
 - 2) Wright, ed. Wülcker, R. P., *Anglo-Saxon and Old English Vocabularies*, i, 553.
British Museum, MS. Harley 978 (2nd half of XIII)
Edinburgh, MS. Advocates' Libr. Misc. 18, 15, 16.
6. (326) *Nominale*, Latin-French.
 - 1) Priebisch in *Bausteine zur rom. Philol.*, 1905, 536.
Oxford, Bodleian Library, MS. Douce 88 (late XIII)
The MSS. not mentioned in Vising: *Anglo-Norman Language & Literature*, are:
British Museum, MS. Harley 219. (f. 152v) proverbs
Oxford, Magdalen College, MS. 188 (f. 5r, 7r) nominale, Latin-french-English.
Oxford, All Souls College, MS. 182 (f. 322r—323r, 327, 331)
Oxford, Bodleian Library, MS. Douce 18 Vocab. English-French (W. de Worde)
7. (327) *Nominale sive Verbale*, 888 ll. mostly rhymed, with English translation.

中世イングランドのフランス語教本

End of XIII.

- 1) Skeat, ed., *Transactions of the Philological Society*, 1903—1906.
Cambridge, Univ. Library, MS. Ee 4. 20 (about 1340)
8. *The Stowe Glosses*, (not in the Vising) Latin names of animals, with French and English equivalents, c. 1200
MS. Stowe 57 (f. 156, 158)

The Fourteenth Century:

9. (386) *A Treatise on the French Language* (with special treatment of homophones), about 850 ll., by Walter de Bibbesworth, c. 1300
 - 1) Wright, T., *A Volume of Vocabularies*, p. 142
British Museum, MS. Arundel 220 (early XIV), MS. Sloane 809 (XIV)
 - 2) Wright, T. and Halliwell, J. O., *Reliquiae Antiquae*, ii, 78.
Cambridge, Univ. Library, MS. Gg 1. 1 (early XIV)
British Museum, MS. Roy 13 A iv (XIII-XIV) fragment, MS. Cotton Vesp. A vi (XIV), MS. Harley 490 (XIV) fragment, MS. Harley 740 (XIV), MS. Arundel 220 (early XIV), MS. Sloane 513 (XIV), MS. Sloane 809 (XIV)
Oxford, Bodleian Library. MS. Selden supra 74 (XIV) fragment
Oxford, All Souls College, MS. 182 (XIV)
Cambridge, Corpus Christi College MS. 450 (XIV)
Cambridge, Trinity College, MS. O. 2. 21 (XIV)
Cheltenham, MS. 8336 (1st half of XIV)
Cheltenham, MS. 8188 (Bibliothèque Nationale nouv. acq. lat. MS. 699)
 - 3) La Rue, Abbé de, (Extr.) *Essais historiques sur les Bardes, les Jongleurs et les Trouveres normands et anglo-normands*, Caen, 1834.
 - 4) Michel, Francisque, *Rapports à M. le Ministre de l'Instruction Publique sur les anciens Monuments de l'Histoire et de la Littérature de la France*, 1838, p. 14.
 - 5) Palsgrave, J., *Lesclarcissement de la Langue Francoyse*, 1530; reprinted by Génin in *Documents inédits de l'histoire de France*, Paris, 1852.
 - 6) Meyer, P., *Recueil d'Anciens Textes*, Paris, 1887, 360. also in *Romania* XIII, 502., *Romania* XXXII, 44.
 - 7) Onions, C. T., in *Times Literary Supplement*, 1922, Apr. 6, p. 228.
 - 8) Owen, Annie, *Le Traité de Walter de Bibbesworth sur la langue française*, Paris, 1929. (not in the Vising)
10. (387) *Orthographia Gallica*, Latin prose treatise with A. -N. examples and rules. 1st half of XIV.
 - 1) Stürzinger, J. ed., *Orthographia Gallica: Altester Traktat über Französische aussprache und orthographie*, Altfranzösische Bibliothek, 1884, VIII.
British Museum, MS. Harley 4971 (XIV) (contains other grammatical or

lexicographical pieces)

Records Office, MS. The Tower (XIV)

Oxford, Magdalen College, MS. 188

Cambridge, Univ. Library, MS. Ee 4. 20 (about 1340)

The MSS. not in the Vising are:

Cambridge, Univ. Library MS. Gg 6. 44 (f. 19r, 19v), MS. Dd 12. 23 (f. 1r, 2v)

Cambridge, Corpus Christi College, MS. 335 (f. 132a, 132b)

11. (388) *Tractatus Orthographie Gallicane*, Latin prose treatise with A. -N. words and phrases, by Coyfurelly. End of XIV.

1) Stengel, E. ed., "*Tractatus ortographie gallicane per M. T. Coyfurelly*," *Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur*, 1879, 1. pp. 16—24.

Oxford, All Souls College, MS. 182 (XIV)

2) Meyer, P., *Romania* XXXII pp. 65—66. Another Latin treatise on conjugation
Cambridge, Trinity College, MS. R. 3. 56 (XIII)

12. *Tractatus Orthographiae* of T. H. Parisii Studentis, (not in the Vising)

1) Pope, M. K., "*Tractatus Orthographiae* of T. H., Parisii Studentis," *Modern Language Review*, Vol. 5, 1910, pp. 185—193.

British Museum, MS. Addit. 17716 (f. 88r, 91r)

Cambridge, Trinity College, MS. B. 14. 39. (f. 155—157)

British Museum, MS. Sloane (f. 513) some rules.

13. (389) *Maniere de Langage*, phrase-book by Coyfurelly. 1396.

1) Meyer, P., "*La Manière de Langage*," *Revue Critique d'Histoire et de Littérature*, 1870, pp. 373—408.

British Museum, MS. Harley 3988 (XV), MS. Addit. 17716 (XV),

Oxford. All Souls College, MS. 182 (XIV)

Cambridge, Univ. Library, MS. Dd 12. 23 (early XV), Trinity College,
MS. B. 13. 40 (f. 179r, 179v)

Cheltenham, MS. 8188 (Bibl. nat. nouv. acqu. lat. 699)

2) Stengel, E., "*Manière de Langage*," (Short continuation) *Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur*, 1, p. 6.

3) Extr. Meyer, P., *Romania* XV. pp. 262—63.

also mentioned in *Romania* XXXII. p. 59.

14. *Maniere de Langage*, (not in the Vising)

MSS. British Museum, MS. Dd 12. 23 (f. 7v—13r), MS. Addit. 17716 (f. 101r—106r)

Cambridge, Trinity College, MS. B. 14. 40 (XV) (f. 148v—154v)

15. (390) *Aprise de Nurture*, 240 ll.
 Oxford, Bodleian Library, MS. Bodley 9 (XIV)
 see: *Les Incipit des Poèmes français antérieurs au XVI^e siècle*, par A. Langfors, 1917.
16. (391) *Treattises* on A.-N. Epistolography, with Examples (partly of the XV cent.)
- 1) Uerkvitz, W., *Treatises on A.-N. Epistolography*, Greifswald, 1898.
 Cambridge, Univ. Library, MS. Ee 4. 20 (about 1340) (letters from 1327—1340, based on formularies drawn up by a teacher Thomas Sampson)
 Univ. Library, MS. li 5. 17 (f. 98v, 100r) (not in the Vising)
 British Museum, MS. Addit. 17716 (letters, first half of the XIV cent.)
 MS. Harley 4971 (letters from 1396—99)
 Oxford, All souls College, MS. 182 (letters from 1400—8)
 British Museum, MS. Harley 3988 (XV) (letters from the first quarter of the XV cent.)
 The Grenville's Library, MS. 7570 (f. 10v—12r) (W. de Worde) (not in the Vising)
 Oxford, Magdalen College, MS. 188 (f. 8r, 8v) (not in the Vising)
 Cambridge, Trinity College, MS. B. 14. 39 (f. 159r, 162r)
17. (392) Similar *formularies* with Latin text in original.
 Cambridge, Trinity College, MS. B. 14. 40 (cf. M.R. James's Catalogue)

The Fifteenth Century:

18. (400) *Donait François* prose treatise by John Barton, c. 1400.
- 1) Stengel, E., "Donait François," *Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur*, 1. pp. 25—40.
 Oxford, All Souls College, MS. 182 (XIV)
 In the same MS. are to be found tables of conjugation and reading exercises.
 The treatise *Petit Livre pour enseigner les enfantz*, published by Stengel together with the *Donait*, has few A.-N. traits.
19. (401) *Femina*, (so named 'quia sicut femina docet infantem loqui maternam sic docet iste liber iuvenes rethorice loqui gallicam'), about 600 four-line stanzas, consisting throughout of two lines of French alternating with two lines of the English equivalent, c. 1400.
- 1) Extr. in Hickes, *Thesaurus*, 1705, i, 154—5.
 2) Wright, W. A. ed., *Femina*, 1909.
 Cambridge, Trinity College, MS. B. 14. 40 (about 1415), Trinity College, MS. B. 14. 39

アングロノルマン研究

Glasgow, Hunter Museum, MS. R. 7.14

20. (402) *Dialogues*, 1415.

- 1) Meyer, P., *Romania*, XXXII, 49.
British Museum, MS. Addit. 17716 (XV)
Cambridge, Univ. Library, MS. Dd 12.23 (early XV)
Cambridge, Trinity College, MS. B. 14.40 (about 1415)
The Grenville's Library, MS. 7570 (*Dialogues of W. de Word*)

21. (430) *Inn Dialogues*, and *Magnière de language*,

- 1) Extr. in Stürzinger, *Orthographia Gallica*, p. xv.
Cambridge, Univ. Library, MS. li 6.17 (late XV) (f. 100v—106r)

22. *Forms*, (not in the Visng)

MSS. British Museum, MS. Harley 4971, MS. Sloane 513
The Grenville's Library, MS. 7570
Oxford, All Souls College, MS. 182
Oxford, Magdalen College, MS. 188
Cambridge, Univ. Library MS. Dd 12.23, MS. Gg 6.44, MS. Ee 4.20
Cambridge, Trinity College, MS. B. 14.39

以上を大別すると、現存する、これらフランス語教本は、(1)語彙集 (2)文法書(文字論)
(3)会話作文教本 (4)書簡文範に分けることが出来る。

語彙集 (Nominalia) の中で最も良い教本として残っているものに Walter de Bibbesworth が書いた、貴族の子供にフランス語を教えるための書がある。13世紀末、よいフランス語を覚えるために、と書かれたこの 'treatise' には、AN 語の多くの特徴を見出し得る。教本そのものが、大陸フランス語の正統フランス語ではない、アングロノルマン語で書かれてあるのである。

中世英文学に輝かしい業績を残した Geoffrey Chaucer は、晩年の作、*The Canterbury Tales* の中で、カンダベリー寺院への巡礼の一人、上品な Prioress、尼僧修道院長の堪能なフランス語を揶揄して、彼女のフランス語は 'Stratford atte Bowe' の流儀であって、パリのそれではないと言及した^⑧。礼節正しく、つつましやかな Madam Eglantine は、恐らく、ベネディクト派の修道院で話されていた、AN 語を習い覚えたのであったろう。

ウィリアム征服王以来、イングランドのフランス語として使用されてきた、アングロノルマン語の特徴はどのようなものであるのか、現存するフランス語教本から資料を得て、その言語的発展と、衰退のあとを辿り、また、どの様な種類の語彙、どの様な文体が教えられていたのかを明らかにしたいと思う。今後の研究方向としては、年代順に従って、語彙集、文法書、会話作文教本、書簡文範より主要な教本を紹介しつつ問題点を詳解してゆきたい。

アングロノルマン研究

〔注〕

- ① F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England; The Oxford History of England* (Oxford, 1943), pp. 617—618.
- ② 歴史学の立場から言えば, *Anglo-Norman England* という名称を使用し得るのはノルマン王朝の終り, 1154年までであろう。しかし, アングロノルマン文学史から見ると, アングロノルマン文学が開花するのは, ヘンリー1世時代である。アンジュー王朝にその最盛期を迎え, 文学作品の創造は15世紀初頭まで続く。
- ③ 15世紀に至るまでイングランドで用いられたこの言語を総称してアングロノルマン語という。この言語に対して, 中世では種々の名称があった。即ち, *lingua gallica*, *Gallicana*, *lingua romana*, *idioma gallicum*, *franceis*, などである。現代においても, この言語を時代的に二期に分け, 前期を *Anglo-Norman*, (13世紀に至るまで) 後期を *Anglo-French* と呼んで区別することもある。これらの名称に関する論文は L. M. Menger, *The Anglo-Norman Dialect* (New York, 1904), p. 4. および, P. Studer, *The Study of Anglo-Norman*, (Oxford, 1920), pp. 4—16. を参照のこと。
- ④ J. E. Matzke, *Lois de Guillaume le Conquerant, en français et en latin, texte et étude critique* (Paris, 1899), p. 19. (21, § 2.)
- ⑤ P. Studer, *The Oak Book of Southampton*, I (Southampton, 1910), pp. xii-xv.
- ⑥ *Ibid.*, *Supplement*, pp. 8—9.
- ⑦ F. Pollock, & F. W. Maitland, *The History of English Law*, I (Cambridge, 1895) rpt. 1968, pp. 83—84.
- ⑧ A. L. Leach, *The School of Medieval England* (London, 1915) rpt. 1969. p. 181.
- ⑨ F. J. Tanqueray, *Recueil de Lettre Anglo-Francaises, 1265—1399*, (Paris, 1916), p. 1.
- ⑩ J. Vising, *Anglo-Norman Language & Literature* (Oxford, 1923) rpt. 1970, p. 58.
- ⑪ P. Meyer, “Mélanges Anglo-Normands,” *Romania*, 38 (1909), pp. 434—35.
- ⑫ E. Kölbing und E. Koschwitz, *Hue de Rotelande's Ipomedon, Ein französischer abenteuerroman des 12 jahrhunderts.* (Breslau, 1889), p. 1.
- ⑬ F. L. Ravenel, ed. *La Vie Seint Edmund Le Rei, an Anglo-Norman poem of the twelfth century by Denis Pyramus*, Bryn Mawr College Monographs, Monographs Series 5 (Philadelphia, 1906), p. 151.
- ⑭ A. Gabrielson, *Le Sermon de Guischart de Beaulieu, édition critique d'après tous les mss. connus* (Leipzig, 1909), p. 3.
- ⑮ T. A. Jenkins, ed. *Espurgatoire Seint Patriz by Marie de France* (Genève, 1974) Slatkine reprints, p. 53.
- ⑯ A. Ewert, ed. *Marie de France LAIS*, 18th ed. (Oxford, 1969) p. 1.
- ⑰ A. Ewert, ed. *Marie de France FABLES* (Oxford, 1966) p. 61.
- ⑱ E. Walberg, ed. *Guernes de Point-Sainte-Maxence, La Vie de Saint Thomas Becket* (Paris, 1964) CFMA, p. 190.
- ⑲ M. Powicke, *The Thirteenth Century 1216—1307: The Oxford History of England* (Oxford, 1953), p. 140.
- ⑳ Ranulph Higden, “Polychronicon,” trans. Trevisa in *Rerum Britannicarum Medii Ævi Scriptores*, Rolls Series, 41.2 (London, 1869) rpt. 1964, p. 161.
- ㉑ Leach, p. 196.
- ㉒ Higden, p. 159.
- ㉓ *Ibid.*, p. 161.

しかし, フランスの本国では, イングランドの国と同様に多種多様のフランス語があること

アングロノルマン研究

にも言及している。

- ②④ M. K. Pope, *From Latin to Modern French with Especial Consideration of Anglo-Norman* (Manchester, 1934), pp. 424—426.
- ②⑤ P. Meyer, ed. “Poème sur l’Antechrist et le Jugement dernier”, *Romania*, 29 (1900), p. 80.
- ②⑥ A. T. Baker, ed. “Fragment of an Anglo-Norman Life of Edward the Confessor,” *MLR*, 3 (1907—8), p. 374.
- ②⑦ Wilham de Wadington, *Manuel des pechez*, quoted by J. Vising, p. 27.
- ②⑧ R. Morris, ed. *Cursor Mundi, A Northambrian Poem of the XIVth Century*. EETS, Os. 57. I (London, 1874) rpt. 1961, pp. 21—23.
- ②⑨ J. Ullmann, ed. “Speculum Vitae,” in “Studien zu Richard Rolle de Hampole,” *Englische Studien*, 7 (Heilbronn, 1884) rpt. 1967, p. 469.
- ③⑩ Mario Roques, ed. *Le Roman de Renart, première Branche, Jugement de Renart* (Paris, 1970) CFMA, p. 81.
- そこでルナール狐は会釈した。「御気嫌よう、大將、旦那の仰有ることは分かりかねますが。」イザングランが答えた。「神のお救いを！ 兄さんは何処のお人で、何処の国から来なすったね、フランス生まれじゃないようだ。知っている所でもないね。」「いや、その通り、旦那衆、ブルターニュの者でござんす。儲をすっかりすって仲間に追われていますんで。しかし、あっしの手がかりは何もありは致しません。フランス中、イングランド中、仲間は隈なく探しましただよ。けれど、あっしはパリに戻り、フランスことばを立派に会得してえのでござんす。」
- ③⑪ H. Rashdall, *The University of Europe in the Middle Ages*, III (Oxford, 1895) rpt. 1969, pp. 162—63.
- ③⑫ *Customary of the Benedictine Monasteries of Saint Augustine, Canturbury, and Saint Peter, Westminster*, ed., E. H. Thompson, Henry Bradshaw Soc. XXIII, 210; XVIII, 164. quoted in A. C. Baugh, *A History of English Language* (New York) p. 165.
- ③⑬ Leach, p. 195.
- ③⑭ G. J. Dilles, ed. *Froissart, Chroniques, dernière rédaction du premier livre, édition du manuscrit de Rome Reg. Lat. 869* (Paris, 1972) TLF, p. 232.
- ③⑮ A. Owen, ed. *Le Traité de Walter de Bibbesworth sur la Langue Francaise* (Paris, 1929), p. 65.
- ③⑯ Alexander Barclay, *Introductorie to write and to pronounce Frenche* (London, 1521) の Prologue において ‘The same tretysse hath ben attempted by dyuers men before my dayes’ と書かれてあることや、J. Palsgrave, *Lesclarcissement de la Langue Francoyse*, 1530. に、‘. . . . Whe it was commaunded that the grammar maisters shulde teche the youth of Englande joyntly Latin with Frenche, there were diverse suche boke divysed.’ と引証されてあることなどを参照。cited in J. Stürzinger, *Orthographia Gallica*, Einleitung, p. 1.
- ③⑰ *Vising*, p. 68, et sqq.
- ③⑱ F. N. Robinson, ed. “General Prologue,” *The Canterbury Tales, in The Works of Geoffrey Chaucer*, p. 18. ll. 124—126.

* * * * *

WALTER DE BIBBESWORTH の語彙集

— Facsimile —

Cambridge, University Library, MS. Gg 1. 1

(fol. 279^v c. 1. 21 — fol. 294^{r-b})

《《*Le tretiz ki mun seignur Gauter de Bitheswey fisit a madame
Dyonise de Muntechensi pur aprise^ẽ de langage*》》

* * * * *

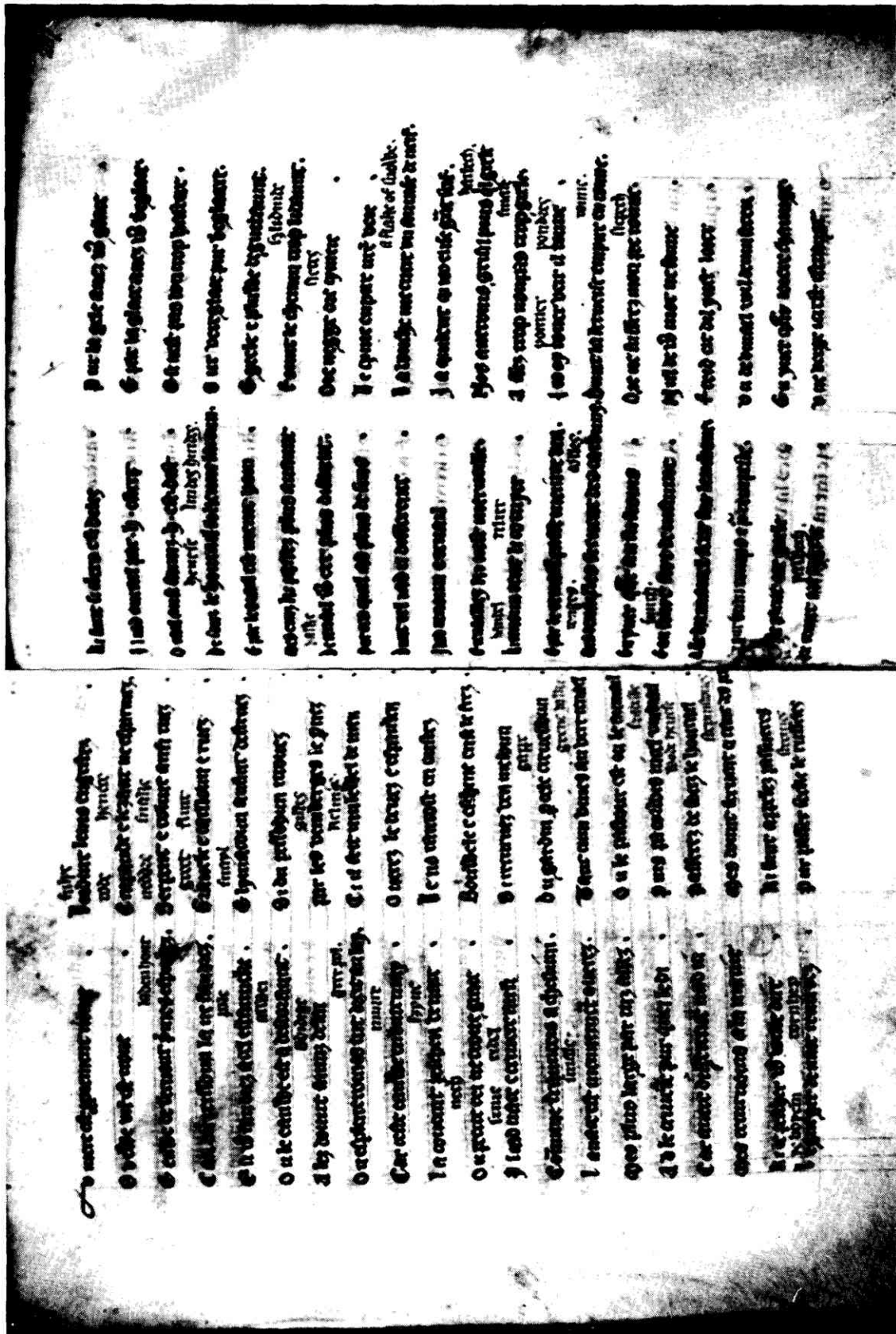
① pur lodes ames de mouantant.
 ② Non-cra . deun -e en -le -c la .
 ③ Qui en poit fort uncois apais .
 ④ Et n'est autret estparis .
Qu'il veit ou unum ebat
 ⑤ A grande de mouan chaf
 ⑥ Et c'est la grande ses leuor
 ⑦ Uncois la grise au douch
 ⑧ Et en les epareus, uncoisley,
 ⑨ Uncois leuor
 ⑩ Uncois leuor de mouantant
 ⑪ Et en leuor de mouantant
 ⑫ Et en leuor de mouantant
 ⑬ Et en leuor de mouantant
 ⑭ Et en leuor de mouantant
 ⑮ Et en leuor de mouantant
 ⑯ Et en leuor de mouantant
 ⑰ Et en leuor de mouantant
 ⑱ Et en leuor de mouantant
 ⑲ Et en leuor de mouantant
 ⑳ Et en leuor de mouantant

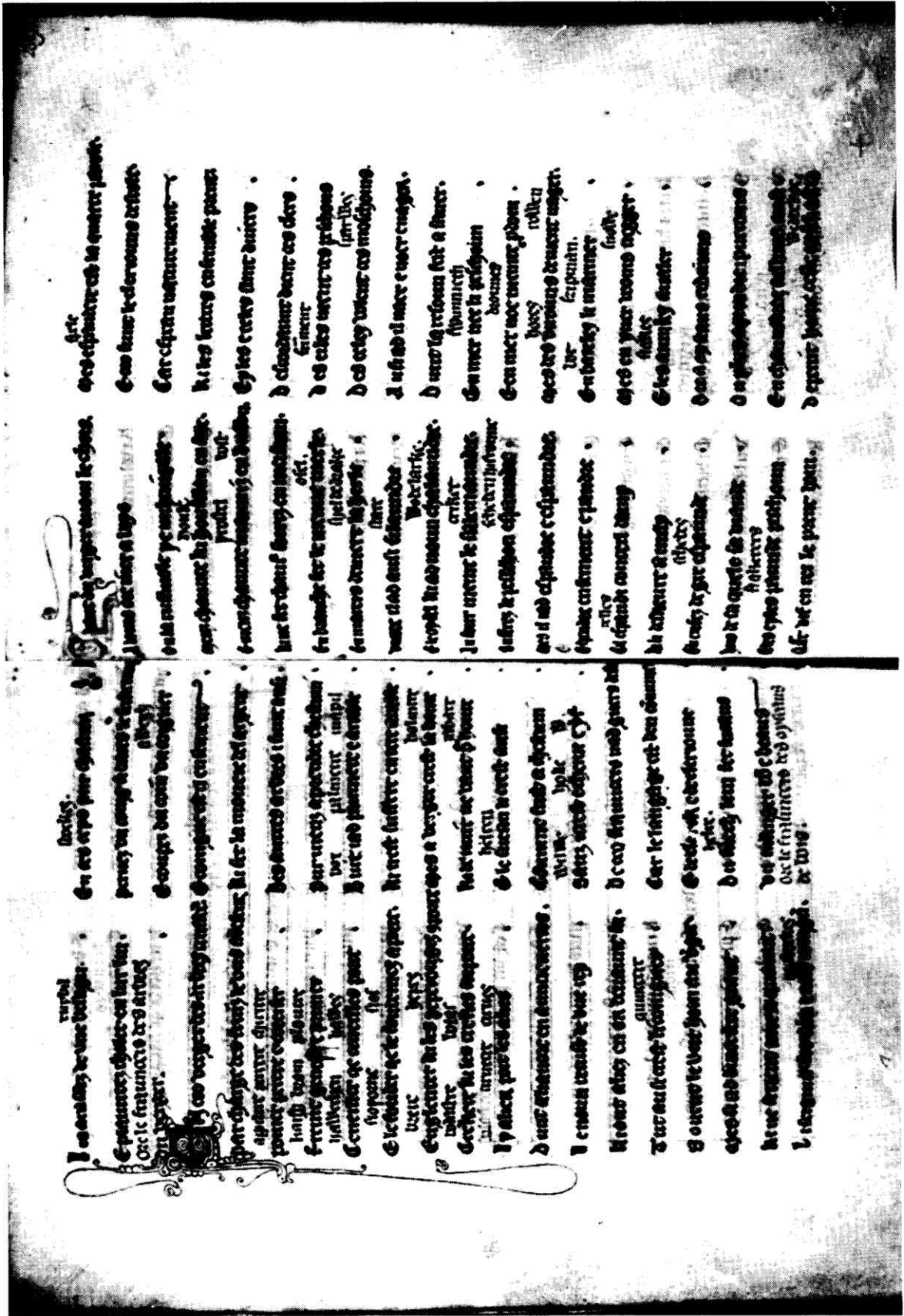
① c'ou d'ou les oes ne les frai carbe met uncois .
 ② De le kare pur oter uncois que uncois
 ③ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ④ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑤ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑥ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑦ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑧ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑨ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑩ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑪ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑫ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑬ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑭ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑮ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑯ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑰ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑱ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑲ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑳ Et c'est pur oter uncois que uncois

① c'ou d'ou les oes ne les frai carbe met uncois .
 ② De le kare pur oter uncois que uncois
 ③ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ④ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑤ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑥ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑦ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑧ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑨ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑩ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑪ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑫ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑬ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑭ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑮ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑯ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑰ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑱ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑲ Et c'est pur oter uncois que uncois
 ⑳ Et c'est pur oter uncois que uncois

1 a l'avec lez...
 2 a l'avec lez...
 3 a l'avec lez...
 4 a l'avec lez...
 5 a l'avec lez...
 6 a l'avec lez...
 7 a l'avec lez...
 8 a l'avec lez...
 9 a l'avec lez...
 10 a l'avec lez...
 11 a l'avec lez...
 12 a l'avec lez...
 13 a l'avec lez...
 14 a l'avec lez...
 15 a l'avec lez...
 16 a l'avec lez...
 17 a l'avec lez...
 18 a l'avec lez...
 19 a l'avec lez...
 20 a l'avec lez...
 21 a l'avec lez...
 22 a l'avec lez...
 23 a l'avec lez...
 24 a l'avec lez...
 25 a l'avec lez...
 26 a l'avec lez...
 27 a l'avec lez...
 28 a l'avec lez...
 29 a l'avec lez...
 30 a l'avec lez...
 31 a l'avec lez...
 32 a l'avec lez...
 33 a l'avec lez...
 34 a l'avec lez...
 35 a l'avec lez...
 36 a l'avec lez...
 37 a l'avec lez...
 38 a l'avec lez...
 39 a l'avec lez...
 40 a l'avec lez...
 41 a l'avec lez...
 42 a l'avec lez...
 43 a l'avec lez...
 44 a l'avec lez...
 45 a l'avec lez...
 46 a l'avec lez...
 47 a l'avec lez...
 48 a l'avec lez...
 49 a l'avec lez...
 50 a l'avec lez...

① ces a ad d'antier
 ② unypham uel uny pham
 ③ curys phos hery le hery
 ④ est est de hery
 ⑤ le fa de ch'ham hery le hery
 ⑥ le hery est hery le hery
 ⑦ hery est hery le hery
 ⑧ hery est hery le hery
 ⑨ hery est hery le hery
 ⑩ hery est hery le hery
 ⑪ hery est hery le hery
 ⑫ hery est hery le hery
 ⑬ hery est hery le hery
 ⑭ hery est hery le hery
 ⑮ hery est hery le hery
 ⑯ hery est hery le hery
 ⑰ hery est hery le hery
 ⑱ hery est hery le hery
 ⑲ hery est hery le hery
 ⑳ hery est hery le hery
 ㉑ hery est hery le hery
 ㉒ hery est hery le hery
 ㉓ hery est hery le hery
 ㉔ hery est hery le hery
 ㉕ hery est hery le hery
 ㉖ hery est hery le hery
 ㉗ hery est hery le hery
 ㉘ hery est hery le hery
 ㉙ hery est hery le hery
 ㉚ hery est hery le hery
 ㉛ hery est hery le hery
 ㉜ hery est hery le hery
 ㉝ hery est hery le hery
 ㉞ hery est hery le hery
 ㉟ hery est hery le hery
 ㊱ hery est hery le hery
 ㊲ hery est hery le hery
 ㊳ hery est hery le hery
 ㊴ hery est hery le hery
 ㊵ hery est hery le hery
 ㊶ hery est hery le hery
 ㊷ hery est hery le hery
 ㊸ hery est hery le hery
 ㊹ hery est hery le hery
 ㊺ hery est hery le hery
 ㊻ hery est hery le hery
 ㊼ hery est hery le hery
 ㊽ hery est hery le hery
 ㊾ hery est hery le hery
 ㊿ hery est hery le hery





L'en ardeur de la vie...
 E par un...
 C'est le...
 L'...
 Le...
 Le...
 Le...
 Le...
 Le...
 Le...
 Le...
 Le...

L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...
 L'...

Manuscript page showing text in Gothic script, likely from a historical document or book.

